心よく二三碗を喫して玄ばし憩へるうち、主のいへるは、我はもと此地の産にてもなかりしが、もと調度のさし物を職として、二十一年ほどは京にくらしつれども、不仕合なること打つゞきて、歳はより、目はわろし、少しの玄るべにて、今はこの地に老朽ぬるなり、茶の湯といへることも、はじめはかゝるすさびより起りけるにやなどいひつゝ、菓子を椀に盛ていだしつれば、予とりて見るに、たゝらの木の芽に味噌をくるみて炮りたるなり、珍らしき口取かなとて、いとうまく食て、茶數碗を過しけるうち、主の申は、我が京に在し頃、數々の茶人宗匠など馴染まゐらせて、茶席にも迎へられ、薄茶建ることも習おぼえ侍れど、大かたの人は、茶の湯を別のことのやうに心得給ひて、あつらへ物等もいとむつかしく候、東山にて何庵とか申宗匠の建たる席を羨しく思ひて、その好のかたに建たしとて注文取しに、床板を松にして節七ッあるを好めり、我等思ふには、いかなるわけにて節數七ッ、ある板をもとむるにやと、いぶかしさに問ければ、師の建たる席に、床板の節七ッありければ、それを擬するなりといへり、笑ふべきの甚しきにあらずや、師の造られしときは、定めて節なき板のなきまゝに、ふしある板にてせられしなるべし、さあれば、いかに師のあとを慕へばとて、わざ〳〵疵あるものを求むるは、道を嗣にはあらで、顰にならひて師の疵をあらはすと同じかるべしとおもへり、この道は只きよらにせよといふにはあらず、きたなからず、あり度道具とても、足らぬ所を何かにて、その時の間に合するを馳走とはするなるべし、すべておもしろきことは足らぬところにありて、足り過たるに雅なることなし、人にはみなくせありて、さま〳〵に好みを致せども、くせを捨ざれば、風流の道人にはあらず、理に入て理を通れたる人ならねば、茶好といふのみにて、茶道の人とは思はれ侍らずとて、その立居ふるまひなどおくゆかしく、この者を連行て、家にて養ひおきたく思へり、

〔長閣堂記〕一數寄をたしなまんは、ふだん茶獨たてまじきものなり、本客の時、かの自由思はず出